

---

# 彼氏以上旦那未満（トム夢？）

峰春秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼氏以上旦那未満（トム夢？）

### 【著者名】

峰春秋人

N1876M

### 【あらすじ】

トムさんと涙都ちゃんの愛しあうストーリー。

(前書き)

可愛いいなあー涙都。  
でも・・・けいおん 思い出すww

彼氏にはふわわしても旦那にするのは嫌。

いつかはプロポーズされて旦那になるのかもしれない。  
けど、今はそんなこと考えるのはやめて今を楽しもう。

「トムちゃん。」  
「なんだい？」  
「一緒に買い物行こうよ。」「いいけど・・・なんで？」  
「アイスが切れちゃったの。」「また？」

「あー見てみて。新しい味があるよ。」  
「本当だ。」「トムちゃんとコンビニに入ると私はかごを持たないでトムさんが持つ。  
そこに『サドナツ』とアイスをいれていく。それもぼりぼりくんだけ。

「あー見てみて。新しい味があるよ。」「いいよ。一口もひつからね。」「ああ。」「

そんな会話はあるで夫婦つてよく言われるけど・・・ありえない。

私はまだ高校2年生だしさートムさんつてそういういえばいくつ？

20歳はあり得なくてせめて26とか？

うわー歳が10以上離れてるつて・・・複雑。

まあ、いまさらトムさんと別れる気もわからないけど。

「ハビ」を後にした私とトムさんは家へと足を進めた。

「トムさんと一緒に結婚したい？」

「・・・別に。」

「そつか。」

「涅都は？」

「私はトムさんが田那さんつて考えると笑っちゃう。」

そう私は言つてやつた。

トムさんは苦笑しながら小さく「だな。」と言つた。

私はただこの関係のままのほうがいい気がした。

ほら・・・人生ほとんどがそうでしょ？

目指していくことが達成されたらつまらない。

それと一緒に。

私とトムさんが結婚したらそれで何が変わってしまうの？

もういろんなことにトキメかない？それとも普段のまま？

ならこの関係のままでいい。

私はトムさんと結婚する気は全くとは言えないけどそれほどない。

「トムさん。」

「ん？」

「家に泊まつていい？」

「ああ。『自由』。」

そう。この関係。

自分の家と彼氏の家を行ったり来たりする関係。  
それがいいの。

同居なんていつも会えるから駄目。

まあ、私はトムさんに毎日会いに来てるけどね。

私の家は池袋と隣駅の大塚とのちょうど真ん中ぐらいに住んでる。  
だから、学校帰りに会いに行けばいいもの。

ちなみに学校は池袋の来良。あそこが一番落ち着くの。

「何食べる?」

「私が炒飯でも作るよ。」

「野菜少ないよ。」

「何がある?」

「えーと・・・ネギと一インジンだけ。」

「なら買い物行こう。」

「また外での?」

「私だけで行つてくれるよ。」

「いや・・・一緒に行く。」

こうやってたまに食事を作つてあげられるのも恋人同士だから。  
夫婦になつたら作つてあげるの普通になつちゃうもの。  
トムさんが私に感謝してくれるのがうれしいから。

スーパーにくるとトムさんはよくふらーっとどこかに行く。とくに、  
コーヒーのところ。

だから、私もコーヒーのところにいつも行く。

思つてたよりたくさんの種類のコーヒー豆に圧倒されてしまは  
押し黙る。

トムさんは何袋か手にとつては首を振つて棚に戻す。

「買いたいなら買えば?」

「こや・・・やめとべ。」

と言つてトムさんは毎回棚の前から身を引く。

私がさりげなく値段を確認すると5千円弱はするものばかりだった。  
(高ツー)

いつも驚かされる。

トムさんはやつぱりいつこつた高いコーヒーがいいのかな?  
家に帰つて炒飯を作る間。トムさんは後ろから作る様子を覗いている。

「何?

「いや・・・おもしろいなつて。」

「わづ。作る?」

「うん。」

そうこうしてトムさんに包子を握らせる。

まあ、少しくらいこまね綺麗に切つてくれる。

あとでトムさんの手を見たら、3枚くらい絆創膏が貼られていた。  
炒飯を食べてるときはテレビをつけないで一人で会話をしている。  
炒飯だけじゃないけど。

「学校は?」

「順調。まあ、女子がめんどくさい。」

「何それ?」

「んーと・・・まあ色々。」

「ん?」

「だーかーり、平和島さんと一緒にこらむといひとか折原さんところ  
ところ見られてちょっと。」

口のむる私の顔を見てトムさんは心配そつた顔をする。

別に靴がなくなつたり、教科書が落書きをされたてくらいだし言つ  
までもないのに・・・。

「大丈夫なのか？」

「平気。どうせ飽きたらやめるし。」

炒飯をほおばりながら私が言つけてトムさんはまだ心配そう。  
やめてよ・・・。大丈夫だよ。そんな子供じみたことされてもくこ  
たれないもん。

いつまでもトムさんが悲しそうな顔をすると私も悲しくなる。

「大丈夫だつて。そんな心配しないで。」

「・・・本当に？」

「うん。子供じみた」とされただけだし。平氣だよ。」

「辛いなら言えよ。」

「大丈夫。焼きもちをやいて私にいじめをするくらいなら自分を磨  
けて言つてやつたから。」

にっこりと笑う私を見てトムさんもやつと笑つてくれた。

そう・・・私が好きなのはトムさんだけ。

平和島さんや折原さんなんてくれてやる。一人に彼女がいなければ  
の話ですけど。

ベッドの中で考える。

トムさんが見ていたコーヒーのこと。

思い返せばあのときトムさんは遠慮していた。

でも、無理を言つて買わせてもどうせトムさんのお金だし・・・。

そうだ。来週はトムさんの誕生日だ。

トムさんにプレゼントすれば喜ぶよね。

そう思つて今週のバイトのスケジュールを頭で確認する。

2回しかない・・・。

自給500円で3時間労働が2回。  
500かける3かける2・・・ちょっと足りないかな?  
ともかくバイトを4回にしてもらって前借もしなきゃ。  
トムさんの寝顔を見ながら私はにっこりと笑った。

「待つてね。トムさん。」

次の日からバイトの量が増えた。

週2回を3階へと増やしてしまった。

正直疲れる。

カフェの店員だけど・・・2時間ずっと立ちっぱなしひさすがに辛い。

足がパンパンでも一ヤバイ。

けど、これもトムさんのためと思えば全然大丈夫。

「いらっしゃいませ。」

深々とお辞儀をして顔を上げるとそこには・・・。

「あれ? 涩都だ。」

「マジだ。来良ってバイトいいんだっけ?」

「駄目っしょ。」

「あんた何してんの?」

「あーもしかして平和島とのテート金?..」

「いやいや。あの折原とでしょ?」

「二人をたぶらかすのもいい加減にしたたり?..」

「そーよ! まつたく。」

「あんた見たいな奴なんて援交がお似合いよ。」

三人の同級生ギャル。

別にこんなことには動じない。だつて・・・嘘だもん。すべてが嘘だもん。

私はトムさんが好きで平和島さんや折原さんなんかに興味はないもん。

「」注文がないのでしたらお帰り下さい。」

「はあ？注文はあるしー。」

「では、何にします？」

「援交の似合う女の子一人ください。それと「コーヒー。」

そんな馬鹿げた言葉を一人が言つとほかの子は下品な笑い声を上げる。

店内に響くその声。席に座る何人かのお客が不快そうな顔を向ける。

「すいませんが、冷やかしをなさるのであれば回れ右をしてすぐにお外へと退場願います。」

「はあー？客だつてのこつちは。」

「ちゃんと接客してくださいー援交さん。」

「営業妨害ですよね？なら・・・警察にでも連絡しましょつか。」

笑いながら言う私に三人はうざがうな顔をこちらに向ける。けど、私は真検で冷たい目で三人を見つめた。

「営業妨害じゃないし。だつて本当でしょ？あんたが援交してるの。」

「はーて？そんなことした覚えはないよ。」

「何言つてるの？こないだ黒人っぽい人と一緒に買い物してるの見

たし。」

黒人・・・。サイモン?

・・・あ。違う。

「・・・トムさん。」

「手をつないだり、一緒にいちゃついたり、キスしてたりしてたじ  
やん!」

「援交だよねえー。」

「うわーキモ。」

「その体を売ってるんだあー。」

「あんなのに売るなんて・・・。さいあーぐ。」

言葉は儘く耳を一直線に通り抜けた。

私の中にはトムさんのことだけだった。

トムさんといったことばれてた。まあ、別にいつか。

気付くと三人のギャルはクルツと90度回転して席に向かう。

「そうだ。あの変態のおっさんによろしくね。」

「?」

「趣味悪いし、そんな可愛い子買ってるなんてマジドキモイからつ  
て。」

私は腰に巻かれたエプロンを取つて後ろにいた同僚の子に言葉を投  
げる。

それは精一杯の強がりで正直それ以外のセリフをだしたら泣きそつ  
だつたから。

「休憩入りまーす。」

休憩なんてないのに私は叫んだ。  
精一杯大声で涙が出ないよう。元気を噛みしめて休憩室と反対のお客さんの席へと歩く。  
注文された熱い「コーヒー」を片手に。

「お客さん。」

そう。大声で叫ぶと、ギャルの大股一歩後ろくらいうで止まつた。  
馬鹿にしてきた、ギャルの顔がこちらを向いた。  
ゆっくりと私の腕が伸びて、ギャルの頭に黒い黒い地獄の惨劇へと誘うお湯をかけてやつた。

「ギャアアアアアアア！」

反応は遅かつたけど・・・。

心の中で精一杯喜んで笑つてやつた。

「ハーフああああーーー！」

顔をぬぐつたその手で拳を作つて私めがけて殴りつけよつとする。  
が、それは「ヒーヒー」ようは黒くない手によつて止められた。

「何してんの?」

聞き覚えがあつて優しいその声。

顔をゆっくりと上げるとそこには・・・。

「トムさん。」「

「よー。」

そういう手で煙草を取つて煙を吐く。もつ上方の手で煙草を取つて煙を吐く。といった。

「どうよおー。」「なんで?」「その女が私にコーヒーをー。」「・・・だから?」「はあ?」「あんたがコーヒー頼んだから持つてきたんだ?」

それはそれで、めーとー。

「もー帰るー。」

女は踵を返して店を出て行つた。  
トムさんを見上げて私は口を開けていた。

「どうじでここに?」

「お前のバイト一時間前にスタンばつてた。」「でも・・・なんでバイトのこと?」

「静雄に聞いた。」

「わつか・・・。」

「べつにコーヒー豆いらなーから。」「え?」

「涙都の手作りの豆のまつが好きだ。」

「・・・そつか。」

「おい! 独<sup>はく</sup>柚<sup>じゅ</sup>! なんだこれは!..」「あーすこません!..」

「あーすこません!..」

私はトムさんから離れて店長に頭を下げに行く。  
けど、横田でチラチラとトムさんを見つめていた。

そのあとバイトはクビ。

まあ一応せめてナリコチクられて終了だけだ。

その事件から一週間後。

「トムさん。」

「ん?」

「コーヒーアイスは?」

「あ・・・食べちゃった。」

「嘘!...」

「嘘。」

「よかつた。」

「はい。」

「あれまあーもひ食べてたの?..」

「ああ。」

「つて・・・あとひよつとじやん。」

「一人で食べよひ。」

「いいよーせーのだよ。」

「ああ。」

「セーのー。」

冷たいアイスに一人でかぶりつく。

本当にちょっとだけで一人で食べたら終了しちゃひまださぢないしくておこしくて。

小さな唇とトムさんの唇が触れ合つてなんかセー。

思わず笑っちゃひww  
てかニヤけてしまつ。

コーヒーの味はあまり好きじゃないけど・・・これなら・・・。

【これなら好きになれるかな。】

涙都は笑う。

「HAPPY BIRTHDAY。」

「ありがとう。」

トムさんの温かい胸の鼓動を聞いて私は今・・・とってもとっても

・幸せです。

(後書き)

やつまつ可憐こよね淫都。  
トマさんも好きだけじゃね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1876m/>

彼氏以上旦那未満（トム夢？）

2010年10月21日23時04分発行